古本院侍従集以横田庵諸本書写校合了

小馬命婦集

堀川院御時百首歌奉りける女房の中に

殿上人の

身をもなほ捨てはてぬとなりひらの

はかなかりける

こゝろたにすまぬ出家のたぐひ

池にすむ人の国せばうきやと

おのゝ屋に新人をきたりやしと

人にいとまを思ひ出

元乃法師

またも入江の蘆間に身を捨てつるならぬ舟どもの行きかよふらむ

湖崎に松はかりそたてるみなと出けれは

千鳥ぞなきぬ

むかしはさこそ我ものと思ひしか松の崎にぞ住居なる

きらけれをおしきさとをたちすてゝみれはいはつ

なからかひらけて見えしけり

池水のそこにうつる家もおもひけりけふよりは流とそ成ける

山たかみにほふ花の色も葉もおひくちかくなりぬへし

ひろさはの池の川水

出ても代みなし山のちかひにあひぬるものをあはれよのなか

池つらのこほりもとけぬ梅の花

刈もとむる池のつれなき今はとて身のさかりも花もすきぬる

たのしきを見つゝ身にかへりゆくとなる

てるをや

人ならぬ身をやうらみむ池の水にうつる月をみるかな

山のはのかたかけにうつるしるしの影

そらにたつ影

引きよせてみよこのすみれの色なるか

水の中にもうつる柳のかけ

雑のうちに春をしめあけよ生の花のかけ

こゝろもちうへかくるゝ物ゆゑ
中またるものゝ
なるべし
為にくるそまと思ひわらひ給ふ
みまやゝしまへ日ごとにたゝひして
ゆきをねたひなりかきの詞なくけりやとまたくれ
もちゆひこしらひてをるようとをかれと
あれりしこゝ
人しこゝ出やちもの思ふ給ふをかくなく為しあく
なとつまをる物を見とともをゝ月と

なりもくゝ和歌よさして
明ゝ秋ゝ物へはもうれむの月の見ひ給ふ
返し
いとしをひちへ和歌をつくれ忘れ給ふ
おなしゝ人物しゝ
物をゝとはゝくゝ
又いうれる物ゝ
むたゝ光ゝるゝ物ゝ
返し
物をひくゝ屋ゝ
なとよしをつくゝ

[illegible]

返し

[illegible]

又英なるうぢの次屋へ

返し

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

返し

[illegible]

又[illegible]

[illegible]

[illegible]

十月小春のころ

[illegible]

神無月たつ初霜の[illegible]

[illegible]

霜月の[illegible]

おもと

[illegible]

返し

[illegible]

又ものと人の[illegible]

小けしき[illegible]

思ふ[illegible]

[illegible]

おもと

[illegible]

うへし

いつ[illegible]

伊[illegible]

おもと[illegible]

つまとゝ思ひやりつゝくらせ給ひしを
返し
恋しくは那はまつよ寓乃浦をこゆ恋ちにてとも
又紙
ひるとめしまよひのなくこゑにこゝろひたいやハ
はてもむは返事はかけもいはをこ
山もとのうちのこゝろをのこゝろ
返し
ふるさとの詳ひめ山ひ那ちのあ
又はは自うれ山をうれ

いとしくの出こ来にしたら此中よりつきくれるとひゝ
物とおもふらしみをつゝをまさる
とぬかうらむる袖と思ひせたいくそたえるの人いふへし
ねとおもふにむへ今そ立まさりける
ともれとえ見れハ男の心そうたるか
たうにみえしかそ
いかにも紅と思ひつゝその心尽てよとぬれん
此物とゝ日くるれは出てゝいかのつの
おもふにも月にあるしところある袖の月のはれ
物思ふ人にたまくいかりとちひそなき

夕さ浪の川へ光とてみえかはしらぬ思ひつゝ袖
俊頼朝臣又法性寺入道前関白太政大臣
皇后宮の別当よりにあひて付ところ
又ぬ日袖の中にやとりぬる夜半
底にうつる君
ぬるまやの水にかけるも玉をまつ露とおもふ袖とぬれける
さくら井の泉かなうつる月をみる
出てこたまへる
契りおきし思ひもみえぬ中に秋のことに

もちろん八月ばかりの事なれば物さびしくはあれど
なほ日ばかりとなりぬれば山みしらくらと
とりとりに出ぬと聞りへと又花ゆかりのたうり
しばしうちたくさくとうちとけ
恋しと思ぬるふまもなくて相思ふ人の
返し
いとあはれなる夜半の嵐もたゆるなくに
そきやうの女へうしたりしうち
月ばかりとなりぬれば
あれて女御宮女別書よりくわしくあるべし

そのうちにおとうひときこえかはしたまふ
いとかしこまりのうちにあるべしとて
女御宮女御さうのゆうりのうちにあるべし
返りのせうとにおとうれて
世の人とも
女御さうの
年とし今年もまたつきぬのこころとありぬ
返し
おけうの人無乃やまとうたをとりてみるとをとあるや
返し

永ゆくすえをかけてあはれとおもふ人はあるべしとおもふ
おもふ事はかなくてのちのよにこの人代々の
はかなくなりぬるこの後
あるべきにあらぬ我身のうらやましくこそ
うくし
なにとなくつくづくとながめをるにもかなしきは
堀川とのゝおもかげにてうひ給ひしく
母のかたりぬるあはれ紙はきて
こはうつくしみよとて
かくてひとせとおもふ露の身のきえぬ消ぬとなれば

返し
露の身はきえぬとなれば
堀川殿の石ゝ給ふ
小めのうたなれば
やうにあまりなるこゝろ
をかくるまゝ
返し
きえぬ
はかなく久しきものもしらぬ人くれぬ久しき

[illegible]

建長六年七月十四日以戸部本書写畢結
亦抄有他本者可遂一校也但雖讀所
亦落字之所有如之而已

右小馬命婦集以村井敬義本書写一校了　一

馬内侍集

後涼殿の御前にうへ人ども碁打ちて梅
の花の咲きたるを見ていとなつかしう
しかもとくさかりなるとおぼしたる
盛りにいとをかしう匂ひ来たるに梅の花の
枝をいとなつかしうもてなしたるに
なほ[illegible]
[illegible]
[illegible]
七月七日にて[illegible]